

孤立発見プロジェクト 始動
～社協内の部門を超えて社会的孤立に立ち向かう～

大阪市都島区社会福祉協議会 川原 佳代
(会員登録申請中)

1 取組みの背景

コロナ禍において、社会的孤立の課題がより一層潜在化・複雑化・深刻化している。自ら助けを求めることが難しい方も多く、地域住民等による『気づき』が重要なカギとなる。都島区社会福祉協議会（以下、区社協）では、他区での痛ましい孤立死の事例を機に、孤立している世帯を発見する新たなしくみを早急に検討し実践していく必要があると考え、令和3年1月に見守り相談室（※1）と地域包括支援センター（区社協受託）で『孤立発見プロジェクト』を立ち上げた。

※1 大阪市内各区社会福祉協議会（全24区）に設置されているコミュニティソーシャルワークを推進する部門（市からの委託事業）。3つの機能：①要援護者情報の整備・管理、②孤立世帯への専門的対応、③認知症高齢者等の行方不明時の早期発見

2 倫理的配慮

本報告は「日本地域福祉学会研究倫理規程」を遵守している。

3 『孤立発見プロジェクト』（区社協内の横断的事业）に係る取組み内容

見守り支援に必要な気づきを強化し協働を生む土壌づくりに向けて、次の取組みについて報告する。

- ① 気づきを育む研修会『みんなで考えよう‘気づきのポイント’どこをみる？』
地域福祉コーディネーターと専門職（生活困窮者自立支援事業・基幹相談支援センター・区内の包括支援センター等）で気づきを可視化する研修会を実施。両方で気づきを共有しながら、住民と専門職の視点の違いや互いの強みなどを確認した。
- ② コロナ禍でつながりが希薄になりつつあった築30年188戸のマンション住民と社協がペアになり、ローラー作戦（全戸訪問）を実施した。
- ③ 『つながりいろいろ交流会 ～熱い想い語り、強みで協働を生みだす～』
地域の見守り活動に関係する団体やコンビニ、郵便局、不動産関係者、神社、マンション住民等が集まり、課題を強みで助ける協働を生むマッチング会を開催した。
- ④ 地域福祉コーディネーターによる小学校下毎に広報紙『おうち日和』の発行
コロナ禍で個別訪問が制限される中、『おうち日和』はポストに入れ電話する安否確認のツールとしての役割も併せ持つ。また、個別支援の事例について、年4回発行の区社協発行の広報紙に掲載し、地域住民、関係機関等への啓発を行った。

※2 9つの小学校下の地域会館に配置している地域在住の非常勤職員

4 考察

プロジェクトによる取組みを振り返り、今後の展開もふまえて、次のポイントで考察する。

- ① 区社協内の全事業の職員が「孤立」に関する問題点や社会資源の整理、ローラー作戦に関わることにより、多様な事業を担っている社協の強みを活かし、部門横断的な取組みとなった。
- ② 本プロジェクトでは、地域住民とともに気づきを中心に据え、歩みを進めることにより、新たな協働や社会資源の創出が生みだすことが出来た。

見守り活動のすそ野を広げるため、ICTの活用による新たな見守り活動の仕組みが必要と考え、今後の取組みに向けて検討している。